

聖書：コリント人への手紙第二 4：13～18

説教題：内なる人は日々新たに

日時：2024年11月10日（朝拝）

イエス・キリストの福音を宣べ伝えるパウロに見られた特徴の一つは、彼の歩みには苦難が伴っていたということです。その彼を見てコリントにいた自称大使徒たちはパウロを見下していました。あれは神の祝福がないしるしである。あのような者は神の使徒ではないと。そして自分たちの華やかさ、立派さ、高い地位などを誇っていました。そんな偽教師たちの影響下にあったコリント教会にパウロはこの手紙で、神は人間の弱さを通してご自身の栄光を現されるということを語っています。前回の7節に「私たちは、この宝を土の器の中に入れてあります」とありました。この宝とは、一言で言えばイエス・キリストの福音です。また「土の器」とはもろく壊れやすい人間のことです。立派で頑丈で見栄えのする器でなければ神の福音という宝を持ち運ぶことができないというわけではない。神はむしろ弱い者たちを福音の担い手としてご自身の栄光をより良く示されるのです。そしてパウロたちが置かれた弱い状態、苦しみの状態が色々列挙されました。「四方八方から苦しめられ」とか、「途方に暮れ」とか、「迫害され」とか、「倒され」等々。これらは10節で「イエスの死を身に帯びている」と表現されました。十字架へと進まれたイエス様の足跡に従う者たちとして信者の生活にも「イエスの死を身に帯びている」という特徴が見られて当然であるということです。11節ではさらに「イエスのために絶えず死に渡されている」という言葉でも表現されました。そういう苦難の中でも福音を語る働きをやめないのはなぜかが今日の箇所でも語られています。

13節に「私は信じています。それゆえに語ります」という詩篇116篇10節の言葉が引用されています。この詩篇の作者は苦しみの中にありながら、神を信じている者として、その信仰を告白すると述べています。パウロはそれと自分も同じだと言います。信じているがゆえに語るのであると。ここにキリスト教の大事なスタンスがあると思います。キリスト教は心では信じているが口には出さないという宗教ではありません。イエス・キリストを心の内では信じているが公には告白しないというものではありません。信じているなら語るのです。心の内側にあることと外側に現れる行動は一つです。信じているがゆえに語るのです。

では何を信じているのか、その内容が 14 節で語られます。それは「主イエスをよみがえらせた方が、私たちをもイエスとともによみがえらせてくださる」ということです。イエス様の十字架の死はご自分の罪のための死ではなく、私たちの罪をその身に背負われたがゆえの死でした。イエス様はその死をもって私たちの罪の身代わりを十分果たしたと神が判断されたので父なる神はイエス様をよみがえらせました。ですからイエス様の復活はイエス様個人の出来事ではなく、イエス様により頼む人の罪は今やすでに清算されている！神はその人たちの罪を赦しておられ、その人たちをイエス様と同じ永遠のいのちに生かしてくださる！というメッセージをはっきり語るものです。コリント人への手紙第一 15 章 20 節：「しかし、今やキリストは、眠った者の初穂として死者の中からよみがえられました。」 「初穂」は、その後続く本格的な収穫の前触れです。そのようにイエス様の復活は、その後続くイエス様により頼む者たちの本格的な復活を保証する出来事です。このことを堅く信じるからパウロは苦難があっても福音を語ることをやめないと言っているわけです。苦難の終着点には死があります。しかしそれで終わりとはならない。主イエスをよみがえらせた神は、私たちをもイエスとともによみがえらせてくださる。このことを信じているので恐れずに語るというのです。またその復活の恵みにはコリント人たちも一緒にあずかるということをパウロは述べています。パウロの信仰は決して個人主義的なものではありませんでした。自らが福音を伝えて信仰へと導かれたコリント人たちもやがて復活して、神の前にもともに立たせていただけることをパウロは望み見つけています。

15 節に「すべてのことは、あなたがたのため」とありますが、これもパウロたちの労苦や犠牲的奉仕のことです。それはコリント人の益のために献げた働きでした。また彼らだけでなく、さらに他の多くの人々にも恵みが及ぶようになり、感謝が満ち溢れるようになり、そうして神の栄光が現れるようになるためだと言います。だから私たちは語り続けると言います。確かにそこには苦難が伴います。その先に死があります。しかし神は主イエスに信頼する私たちを主イエスと同じように復活させてくださる。また自分たちのこの働きは人々の救いのために用いられ、さらには神の栄光が現されるために用いられる。このような価値のある働きのためなら喜んで自分の一生といのちささげるとパウロは言っているわけです。私は福音を伝えることに伴う苦難を厭わないと。

そして後半の 16 節以降の有名な言葉につながります。パウロはここで「ですから、

私たちは落胆しません」と言います。これは逆から言えば普通の人が見れば落胆しそうな状況がそこにあったということです。主に従うがゆえの苦しみ、労苦、犠牲がありました。しかし落胆しないと言います。そのように考える彼の確信がここに述べられます。まず 16 節に外なる人と内なる人という表現が出て来ます。これらはそれぞれ何を意味しているのでしょうか。この後の 17 節と 18 節は 16 節と平行関係にあります。それらを見比べて分かることは、私たちの外なる人とは、18 節の「見えるもの」に相当し、従って「一時的なもの」であるということです。やがては過ぎ去るものです。これは地上的なものと言うこともできると思います。この世だけで終わりとなるものです。一方の内なる人は、18 節の「見えないもの」に相当し、従って永遠に続くもの、天の御国での生活につながるものと言うことができます。ある人は一つ目の「外なる人」のことを「外から他人が見た人全体」と表現していました。確かに分かりやすい言い方かと思います。外なる人とは外から人に見える人。それは見た目や容姿や体の健康、身なり、経済的な状態、社会的地位や肩書き、またその人が生まれ持った才能などがあげられます。コリントにいて自分たちは立派だと誇っていた勝利主義者たちは、まさにこのような外面的優秀さを誇っていました。そしてこれらの点で見劣りするパウロを見下していました。しかしこれらはいずれもやがて過ぎ去るものです。どんなに頑張っても私たちの外なる人は衰えて行きます。美貌は崩れ、体力は落ち、老化が進み、色々なものが失われて下降線をたどる一方です。これは地上にある私たちの定めです。ここの「衰える」という言葉は現在時制で記されていますから日々そうであるということです。私たちの外なる人は毎日毎日死に向かって衰えて行きます。生まれた時からそのカウントダウンは始まっています。やがて確実に壊れ行くプロセスの中にあります。ですからこの外なる人にしがみついていたなら必ず落胆するのみです。時間とともに壊れ行く自分を見て耐えられない悲しみと喪失感の中に日々生きなければなりません。しかしパウロはもう一つのこともしっかり見ていました。そして特にそちらに心の目を向けていました。それは内なる人です。これはキリストにあっていのちに生かされている自分のことです。これはいつまでも続くものです。これは外から人間の目で見るとすぐにそれと分かるものではなく、そういう意味で人には良く見えませんが、神の前では確かに見られている本当の自分です。この内なる人は日々新たにされているとあります。すでに 3 章 18 節でそのことが語られました。私たちがキリストに向き、栄光のキリストと交わることを通して栄光から栄光へと日々キリストに似る者へと造り変えられて行く。キリストと結ばれ、キリストの復活のいのちに支えられて、神が定めてくださった神のかたちとしての人間の最終ゴ

ールに向かって日々着実に成長し、聖められて行くと。そのことをパウロはここでも見つめて喜んでいきます。

17 節に「私たちの一時の軽い苦難」とあります。この苦難とは、ここの文脈全体がそうであるように、キリストに従うがゆえの苦難のことです。それは人間的な感覚から言えば決して軽いものではありません。それは大変なものです。ですから私たちは時に尻込みしそうになります。しかしパウロはそれらを「一時」で「軽い」と言うのは、その後に来る栄光との比較において見ているからです。そこに「それとは比べものにならないほど重い永遠の栄光」とあります。ここの「比べものにならないほど」と訳されている言葉は、この章の 7 節で「測り知れない力が神のもの」と言われていたところの「測り知れない」という言葉を 2 回繰り返して重ねる仕方で原文では表現されています。ですから「測り知れない×測り知れない」で、とてつもなく測り知ることができないという意味になるでしょう。そのような計算もできないような将来の栄光との比較で見ると、今の時の苦しみはほんの一瞬で軽いものでしかないと言っているのです。これこそが正しい真の解釈です。そしてここでは今の時の軽い苦難が将来の重い永遠の栄光をもたらすという言い方がされています。これは、これまででも見て来たことですが、苦難の道を通ることなしに将来の栄光はないということです。イエス様は十字架という苦難の道を通って栄光へと入られました。ですから私たちもイエス様の足跡に従って、——ただし私たちはイエス様の恵みに支えられながらではありますが——まずキリストの苦難と呼ばれる道に行く必要があります。そこを通る時、そこを経て、それとは比べものにならないほど重い永遠の栄光が私たちにもたらされるのです。その将来を正しく見つめることによって現在の苦難を正しく捉えることができるのです。

そして最後の 18 節に「見えるものは一時的」とあります。私たちが目で見ている多くのものはやがて過ぎ去ります。どんなに若さを保った美貌も、健康も、富や財産も、地位もそうです。それらは一時的です。しかし見えないものは永遠に続きます。これはそれらは本質的に見えないという意味ではなく、今は見えないというだけであって、やがてははっきり現わされるもののことです。その今は見えないものとはキリストにある本当の自分の姿であり、その私たちがやがて受け継ぐ御国や祝福のことです。それは永遠にいつまでも続くものです。またそれは重い永遠の栄光です。パウロはそれに目を留めると言います。それこそを大事にし、その視点のもとで今日の

歩みを考え、永遠の栄光につながる歩みをして行くと言っています。

果たして私たちの生き方はどうでしょうか。私たちは何に目を留めて生きているでしょうか。私たちの外なる人にばかり目をやり、これに地上の人生のエネルギーの多くを注ぎ込む生き方をしているのでしょうか。他人が見る外見に多くの注意を払い、そのうわべだけで判断する人々からの称賛を得ようとして一生懸命なのでしょうか。そういう視点で生活しているがためにキリストに従うゆえの苦難は毛嫌いし、軽蔑し、なるべくそれには関わらないようにし、そうして自分の地上的健康を保ち、外見を保ち、この世の高いポジションを保ち、わずかな期間、幸せに過ごすことだけを求めているのでしょうか。しかしそのような外なる人に属することはやがて必ず過ぎ去ります。それは一時的なものであり、みな衰えて行きます。従ってこれに重きを置いて生活する人は必ず幻滅するようになります。そして最後に何も残らない結果となります。これとは反対のもう一つの私たちの前にある歩みは、見えないものにこそ目を留めて歩むというものです。それはキリストにある歩みのことです。キリストとともに歩むことを喜びとし、キリストに益々似る者とされる道に行くことです。そこにはキリストの苦難と呼ばれる道もあります。イエス様は「だれでもわたしに従って来なければ、自分を捨て、自分の十字架を負って、わたしに従って来なさい」と言われたのですから、一人一人に必ずその道が用意されているはずで、それが主の御心であるなら喜んでその苦難をも引き受ける歩みへと進んで行く。それは今日のパウロの言葉にあったように、正しい視点で見ると、一時の軽い苦難でしかありません。そしてこの一時の軽い苦難の道を進む時、それとは比べものにならないとてつもなく重い永遠の栄光が私たちにもたらされることとなります。そのことを心に留めてキリストとともに歩むことをいつも大事なこととして求め、キリストに恐れずに従う歩みへと進む者でありたいと思います。たとえその歩みの中で私たちの外なる人が衰えたとしても、キリストにある内なる人は日々新たにされているという御言葉の真理を豊かに喜び味わいつつ、神が備えていてくださる永遠の栄光に向かう歩みを御前にささげる者たちとされて行きたいと思います。